

ハリストス正教会の聖堂建築における設計図面集の役割について

石川 祐一

1. はじめに

前稿「京都ハリストス正教会生神女福音聖堂の建築経緯」¹⁾では、明治36年(1903)に建築された京都ハリストス正教会生神女福音聖堂の設計の過程を考察し、ロシアからもたらされた雛型となる図面を基に建築されたことを明らかにした。また、京都聖堂の他にも、同様の図面集を雛型としたと考えられる教会堂の存在が指摘されていることを報告している。

本稿では、既往の調査・研究成果を参照しながら全国のハリストス正教会の教会堂建築の概要を把握し、雛型となった図面集の関与する事例がどのように位置づけられるのかを確認する。その上で、同図面集が日本における正教会教会堂の変遷にどのような役割を果たしたのかについて考察を試みたい。

2. 「教会外観及び正面の設計図」の考察

各地のハリストス正教会において、ニコライ主教の持参した建築図面が雛型として用いられていることが確認されている。仙台ハリストス正教会のセラフィム辻永昇大主教が入手した「教会外観及び正面の設計図」に付属するイコノスタシスの設計図、会堂

の設計図(集落部における教会建設の際に推奨できるもの)(以降、「教会外観及び正面の設計図」と称する。)がこれらの図面を編集した図面集に該当すると考えられることを、既に前稿²⁾において報告した。同資料は、明治32年(1899)に聖シノドより発行されている。聖シノドとは正教会における教会内組織を呼ぶ一般名詞として用いられるという。

「教会外観及び正面の設計図」には31種類(No.1～No.31)の教会堂設計案の他、建具や細部装飾の詳細図、イコノスタスの設計案などが掲載されている。このうち教会堂設計案を表にしたものが表1である。各設計案には収容人数、構造(石造・木造)の他、説明事項が記載されている。収容人数は80人から1,200人までとなる。図面は基本的に、平面図、正面及び側面の立面図が掲載され、断面図やドーム部分の詳細が含まれているものも見られる。

正教会の教会堂は、玄関の奥に啓蒙所、聖所、至聖所を備えるのが定型である。図面集には、小規模な設計案(図1～2)では1室からなるタイプや、玄関と啓蒙所を兼用するタイプ、聖所と至聖所が明確に分割されていないタイプもみられる。しかし、多くは正教会の定型的な構成をとり、聖所の上部にドームを設けている(図3～5)。啓蒙所、聖所、至聖所の構成をとりな

から集中式の平面とするものも見られる(図6)。外観意匠に現れる要素としては、鐘塔の有無や形状、聖所部分に載る屋根の形状、小塔の有無等によってタイプが分かれている。各案は規模(収容人数)、構造、鐘楼の有無、屋根上の小塔の有無、平面形状といった選択によって、設計案が決まることになり、小規模な教会堂では選択肢も限定される。また、細部意匠についても雛型を参照することができた(図7～8)。

このように、教会堂の建設に際して各々の状況に合わせて、モデルとなる設計案を

選ぶというシステムは、教会建築に関する専門的人材の不足する状況下では極めて合理的であると考えられる。設計案には、「トムスク及びトボリスク県」という記載のあるものが3件見られる。トムスク、トボリスクの両県は、シベリア地域に位置しており、シベリア地域へロシア正教会布教の拠点を整備していく際に、こうした教会堂の標準モデルが役割を果たしたことが推測される。

図版にはスケールが記載されており、凡例にはアルシン(=0.7112メートル)、サ

表1 「教会外観及び正面の設計図」に掲載された教会堂設計案

番号	収容人数	構造	鐘楼等	主な記載内容	備考
No.1	250	石造			(図1)
No.2	100	木造			(図1)
No.3	80	木造		トムスク及びトボリスク県	
No.4	180	木造		トムスク及びトボリスク県	
No.5	500	木造	鐘楼付	壁石造・木造も可	(図11～12) 仙台聖堂に採用
No.6	225	石造		小塔2	(ギリシア十字型)
No.7	360	石造?	小塔2	木造ドームも可	(ギリシア十字型)
No.8	750	石造	小塔2	地下階	
No.9	300	木造	鐘楼付	トムスク及びトボリスク県	(図3)
No.10	200	木造			(ギリシア十字型)
No.11	400	木造	鐘楼付		(ギリシア十字型)
No.12	700	木造	鐘楼付		
No.13	350	石造	小塔2	木造ドームも可	
No.14	400～500	石造		木造ドームも可	(図6) (ギリシア十字型)
No.15	550	石造	鐘楼付	木造ドームも可	(図4)
No.16	150	木造		玄関含めると185人	
No.17	250～300	木造			
No.18	300	木造			(図2)
No.19	450～500	木造	鐘楼付		(図18) 大阪聖堂に採用
No.20	150～185	木造			
No.21	250	木造	鐘楼付		(図17) 松山聖堂に採用
No.22	450～500	木造	鐘楼付		(図15) 京都、豊橋に採用
No.23	450～500	木造			(ギリシア十字型)
No.24	500	石造	鐘楼付		(図22) 函館聖堂に一部採用?
No.25	700	石造	鐘楼付		
No.26	200	木造	鐘楼付		
No.27	600	木造			
No.28	250	石造			(図23) 函館聖堂に一部採用?
No.29	1,200	石造	鐘楼付		(図5)
No.30	150	木造		玄関含めると185人	
No.31	500	木造	鐘楼付		

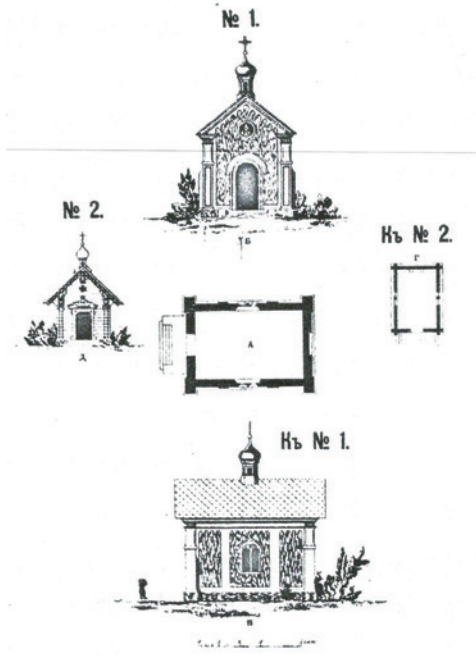


図1 「教会外観及び正面の設計図」 No.1～2

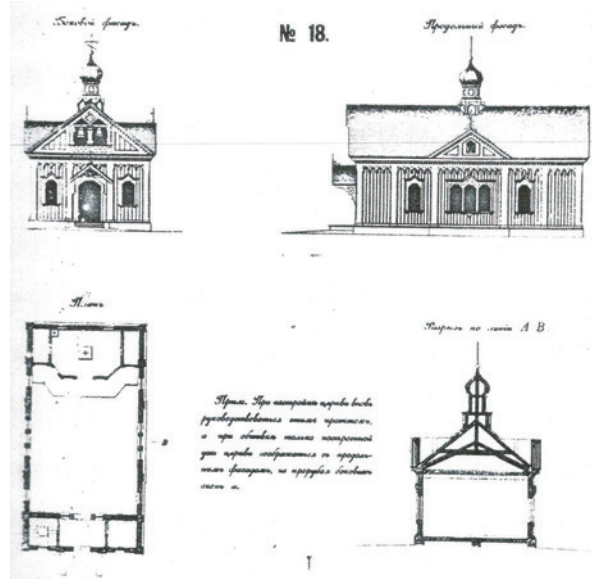


図2 同No.18

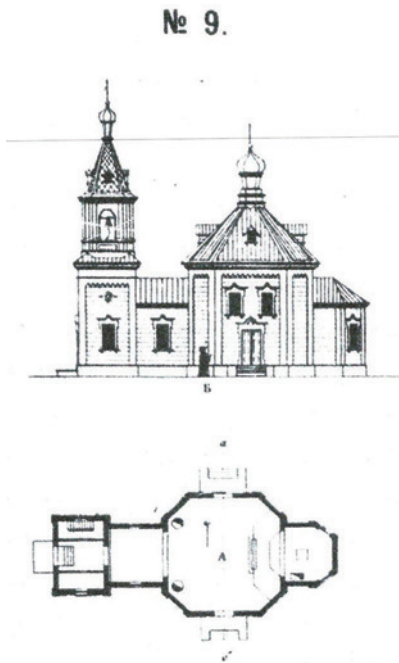


図3 同No.9

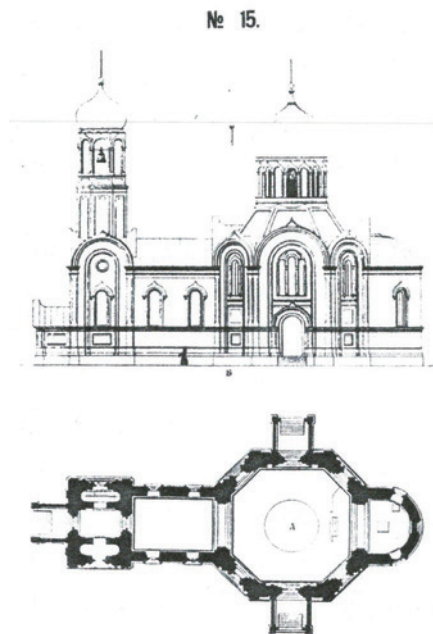


図4 同No.15

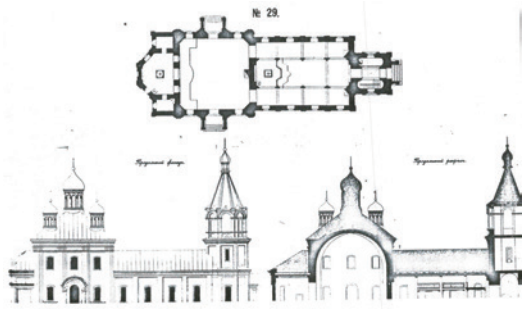


図5 同No.29

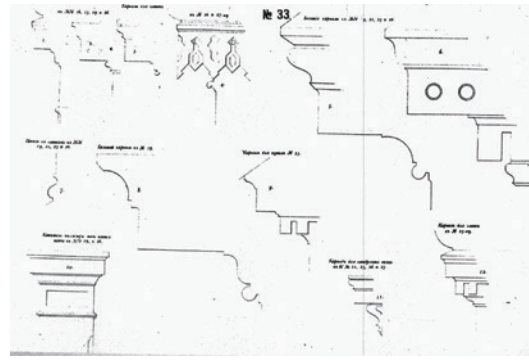


図7 「教会外観及び正面の設計図」柱頭飾り詳細図

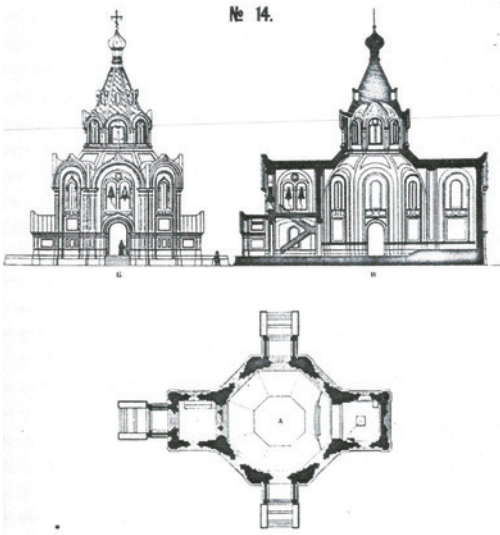


図6 同No.14

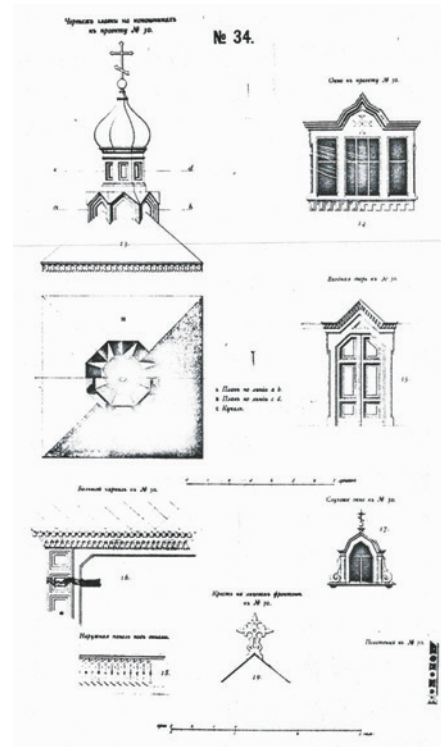


図8 同クーポル, 建具詳細図

ジェン ([С а л л е н т] = 2.1336メートル / 3アルシン [А р ш и н] = 1サジェン) という当時のロシアの単位が記載されている³⁾。京都聖堂などの実寸法を勘案すると、教会堂の平面図、立面図等に用いられている縮尺には、原則としてサジェンが使用されていると考えられる。

なお、後述するように、ニコライらが用意した図面を雛型とする聖堂がいくつか見られ、「原本『プロジェクト デレヴァンノイ

ツェルク井』『木造聖堂の図解』(松山聖堂)、「聖宗務院の建設承認済み教会設計およびファサード図鑑」(大阪聖堂)などの表現がなされている。これらが同一のものを指すか否かは不詳であるが、ただしこれらの図面番号は「教会外観及び正面の設計図」と一致しているため、ロシア正教会では番号が固定された設計案が確立していたものと推測される。とすれば「教会外観及び正面の設計図」は明治32年(1899)に

刊行されているが、既に確立されていた設計案を編集したものと推測するのが妥当であろう。

3. 全国におけるハリストス 正教会聖堂建築の概要

各地のハリストス正教会については既往調査・研究が報告されている。このうち、現存する教会堂の他、現存しないものの資料から概略が確認できる主要聖堂を一部加え、一覧にしたものが表2である。こうした調査研究を参照して、以下にその概要を示したい。

(1) 明治初期の教会堂

■初代函館（箱館）教会堂

安政5年（1858）、箱館（現函館）にロシア領事館が開設された。ロシアでは領事館の開設に合わせて司祭を派遣することになっており、翌年、領事館内の施設として「祭祀堂」が建てられた後、安政7年／万延元年（1860）までには敷地外に礼拝堂が建てられたとされる。鈴木甲子男氏、麓和善氏はこの旧聖堂の建築整備の過程について報告している⁴⁾。古写真（写真1）等から、木造の建物で、啓蒙所の上部に鐘楼が載り、聖所部分の屋根は宝形造の上に八角



写真1 初代函館（箱館）教会

形状のドラム、その上部には葱花形のクーポルが載る意匠と確認されている。簡素ながらもロシア正教会の教会堂形式を踏襲したものであったと考えられる。

■東京十字架聖堂

東京十字架聖堂は、東京の布教の拠点として明治5年（1872）にニコライが移った地に位置し、後に同敷地には東京復活大聖堂（ニコライ堂）が建てられた。明治6年（1873）に伝教館と聖堂の建設が始まり、翌7年に伝教館が概ね完成、明治8年（1875）には聖堂部分も竣工して成聖式が行われている（写真2）。設計者は不詳であるが、横浜居留地で設計事務所を開設していたフランス人のジュール・レスカスとする伝承がある⁵⁾。

ニコライの居館を兼ねた2階建の伝道施設で、2階部分に聖堂としての空間が配された。古写真によれば正面右手寄りに八角形を半切りした形状の突出部分を設けており、同部分が至聖所であったとされる。明治24年（1891）にニコライ堂が成聖され、聖堂としての機能を譲った。関東大震災（大正12年）で被害を受けた後、2階部



写真2 東京十字架聖堂

表2 全国の主なハリストス正教会教会堂一覧 (概要が確認できる教会堂)

竣工(成聖)年代	名称	構造	基本設計	実施設計等	施工	備考	現存
1860年(万延元)頃	函館教会堂(初代)	木造					×
1875年(明治8)	東京十字架聖堂	煉瓦造	ジュール・レスカス(伝)			居館兼用	○一部
1877年(明治10)	金成教会堂(初代)	木造				民家転用	×
1879年(明治12)	佐沼教会堂	木造					×
1880年(明治13)	石巻教会堂	木造					○移築
1881年(明治14)	旧手賀教会堂	木造				民家転用 (1897頃増築)	○移築
1883年(明治16)	涌谷教会堂	木造					×
1889年(明治22)	疋教会堂	木造				和風	×
1891年(明治24)	東京復活大聖堂	煉瓦造・石造	ミハイル・シチュールポフ	ジョサイア・コンドル			○
1892年(明治25)	仙台聖堂	木造	図面集(No.5)	ワシリイ岡本			×
	曲田聖堂	木造		シメオン貫洞	シメオン貫洞 他地元大工		○
1901年(明治34)	京都聖堂	木造	図面集(No.22)	松室重光	大西		○
1908年(明治41)	松山聖堂	木造	図面集(No.21)	河村伊蔵(工事監督)			×
1910年(明治43)	大阪聖堂	木造	図面集(No.19)	河村伊蔵(工事監督)			×
1912年(大正元)	修善寺聖堂	木造					○
1913年(大正2)	豊橋聖堂	木造	図面集(No.22)	河村伊蔵(実施設計・工事監督)			○
1913年(大正3)	半田教会堂	木造				和風	○
1915年(大正4)	白河聖堂	木造		河村伊蔵(工事監督)	中村信太郎		○
1916年(大正5)	函館聖堂	煉瓦造	図面集(No.24・28?)	河村伊蔵(工事監督)			○
1934年(昭和9)	金成聖堂	木造	河村伊蔵・内井進		木村利三郎		○
1935年(昭和10年)	横浜聖堂	木造	内井進				×

分が解体されて平屋建となり、以降司祭館等として活用され、現存している。

■石巻教会堂

現存する石巻教会堂は明治13年(1880)に竣工した建物である(写真3)。正面に八角形を半切りにしたポーチ部分を設け、2階部分を至聖所とする。ポーチ奥には両側に十字型に突出させている。1階には集会室、司祭室等を配し、2階に聖所、至聖所を確保する平面である⁶⁾。

石巻教会堂の外観意匠については、坂田泉氏がポーチを設ける外観意匠や漆喰仕上げ等から、擬洋風建築として評価している⁷⁾。一方、鈴木甲子男氏はこの評価を批判し、東京十字架聖堂の外観突出部の意匠を模したものであると指摘した⁸⁾。黒田順子氏・泉田英雄氏は、石巻教会堂と同様の形態を持つ佐沼教会堂(明治12年)、涌谷教会堂(明治15年)を上げている。そして、その年代順に十字架聖堂を模してまず佐沼教会堂が建てられ、その後規模の小さい石巻教会堂、涌谷教会堂が同様の形態でつくられたとしている⁹⁾。



写真3 石巻教会堂

(2) 東京復活大聖堂(ニコライ堂)

明治12年(1879)にニコライは主教叙任のためロシアに一時帰国した。このロシア滞在時に東京に大聖堂を建築するための画策を行っている。ニコライの日記によれば、イシドル府主教の推薦するロシア人建築家のミハイル・シチュールポフに設計を依頼することになったことが確認される。シチュールポフの来歴は池田雅史氏の紹介¹⁰⁾に詳しいので、以下に概観する。

1850年代以降、ロシアではビザンチン様式のリヴァイヴァルが提唱されており、1860年代以降シチュールポフもその動きに参加した。70年代には鉄骨を用いたビザンチン・リヴァイヴァルの聖堂を設計しており、ニコライ堂にも同様の工法が反映されているという。シチュールポフの当初案は規模が大きく建設費用がかかりすぎるため、府主教の指示により規模が縮小されたとされている。

日本に戻ったニコライは聖堂の実施設計・工事監理をジョサイア・コンドルに依頼し、明治17年(1884)3月に着工、同24年(1891)に竣工している(写真4)。工事請負は長郷泰輔とされる。ギリシア十字型の平面で、聖所上部に大ドームを設け、玄関上部に鐘楼を備えている。躯体を煉瓦造とし、大ドーム部分に鉄骨を用いる他、小屋組、床組を木造としていた。大ドームを掲げる本格的なビザンチン様式を用いる聖堂は日本ではニコライ堂のみであり、資金等の制約により変更がなされたことを考慮しても、ロシア人建築家によるロシア正教の本格的な聖堂が直接的に移入された唯一の建物であったと言える。

なお、大正12年(1923)の関東大震災では鐘楼が倒れ、聖所のドーム屋根が落下した。この際、岡田信一郎の設計により復興がなされた(写真5)。昭和2年から4年(1927~29)にかけて、鉄筋コンクリート造によって補強し、鐘楼の高さを減じ、ドーム屋根の形状を変更するなどの改修がなされた¹¹⁾。

(3) ニコライ堂以降の明治期教会堂

■ 仙台聖堂

仙台聖堂は、明治25年(1892)に成聖



写真4 東京復活大聖堂(竣工時)



写真5 東京復活大聖堂(現状)

式が行われた木造の建物である。ニコライは本格的な聖堂の建築を望んでいたが、現地の日本人スタッフの間では資金不足を理由に難色が示されていた。明治24年には、仙台を訪れたセルゲイ・クレボフ司祭が「主教より遣はし図面を縮小するも差支えなし」と現地スタッフに伝え¹²⁾、最終的には、「主教ニコライ師の設計せられる図案の如き大聖堂を建築するの力なかりしかば、更に奥行十四間八尺、幅六間の二尺(狭き所にて)その高さ五丈八尺、鐘楼の高さ七丈一尺余、総坪数六十七坪の図案を作り」聖堂の成聖式を上げたと記録されている¹³⁾。

これによれば、規模の大きな聖堂を望んでいたニコライ主教が示した図面が存在すること、資金等の関係で同図面の規模を縮

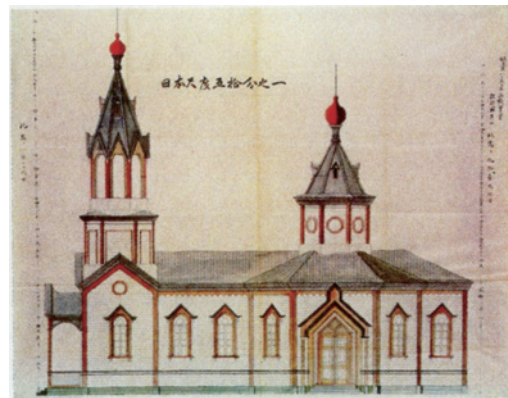


図9 仙台聖堂立面図(原設計図)

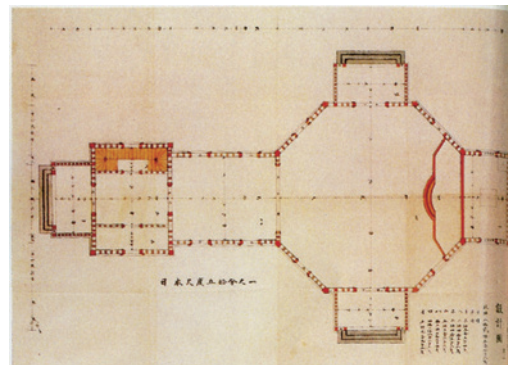


図10 仙台聖堂平面図(原設計図)

小して聖堂が建築されたことが分かる。最終的には大工でもある信者・ワシリイ大西が東京から派遣され、図面作成と見積りを担当したとされている¹⁴⁾。

このニコライの示したとされる図面は現在所在不明となっている。しかし、小倉強氏の論考には仙台聖堂の原設計図と考えられる立面図(図9)、平面図(図10)が掲載されており¹⁵⁾、同資料が「ニコライの図面」に該当する可能性が高いと推測される。この図面の外観意匠や平面形状は「教会外観及び正面の設計図」のNo.5(図11・12)と一致している。No.5の奥行をサジェンのスケールで計算すると約31メートルとなるが、読取り誤差を考慮するとしても、原図面の規模を縮小して建設したとする経緯と符合する。

最終的に建築された聖堂は第二次大戦時の空襲により焼失しており、古写真(写真6)から外観を確認できるのみである。焼失した聖堂を推測した平面図が坂田泉氏、鈴木甲子男氏から提示されている¹⁶⁾。両者は啓蒙所部分の形状で意見を異とするが、いずれも原設計の奥行長さを短くした案となっている。古写真から確認できる外観では、鐘楼の意匠は異なるものの、玄関部分の形状、聖所部分屋根のドーム形状、窓などの原設計図が反映されている。

このことから、仙台正教会に残されていた原設計図は、「教会外観及び正面の設計図」のNo.5に該当する設計案であり、ニコライから提供されたものと推測される。同設計案が所々の制約から部分的に平面形状を変更する形で規模が縮小し、実施設計となったものと考えられる。

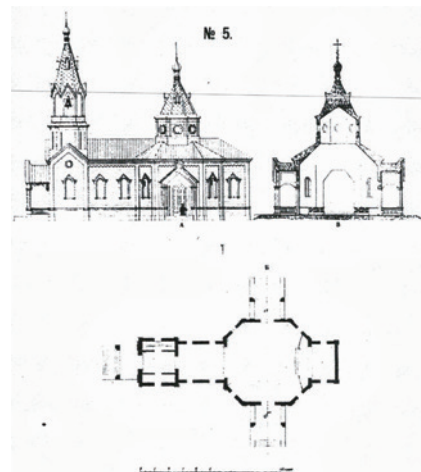


図11 「教会外観及び正面の設計図」No.5

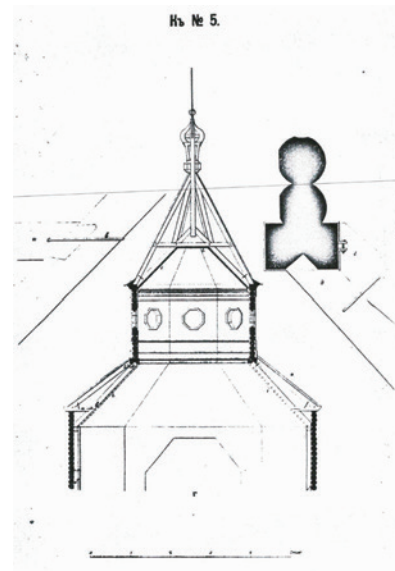


図12 同No.5屋根詳細図



写真6 仙台聖堂外観

■曲田聖堂

曲田聖堂は秋田県大館市に所在する規模の小さい木造の建物である（写真7）。信者であった豪農・イオアン畠山市之助が私財を投じて自らの土地に建築した建物で、仙台聖堂と同じく明治25年（1892）に成聖されている。聖所部分の屋根には八角錐の屋根を載せるなど、他の明治期の小規模な教会堂とは異なり、簡素ながらも正教会の一般的な形式が用いられている¹⁷⁾。

建築時の記録は残されていないが、畠山の招きを受けて同地を訪れたシメオン貫洞が地元大工2名とともに施工したとされる。また、貫洞は大工を生業とし、建築家のジョサイア・コンドルの元で仕事をした経験を有し、ニコライ堂の施工にも関与したことで、曲田聖堂の建築に際して図面を携えてきたことが伝えられている¹⁸⁾。

曲田聖堂に該当する設計案は「教会外観及び正面の設計図」には見当たらない。このため、図面集等の設計案を雛型としたのか否かについて検証することは困難である。しかし、No.16のような小規模で簡素な形式の設計案を基にして、意匠の簡素化や平面の変更などのアレンジを加えている可能性も全くは否定できない。ここでは、東京の正教会から持参されたとされる設計案の存在についてのみ指摘しておきたい。



写真7 曲田聖堂

■京都聖堂

ニコライ主教は当初、京都聖堂について、小規模な礼拝堂を想定していたが、鐘楼のない300人収容の聖堂案に変更することにした。明治33年（1900）7月の現地における協議において、ニコライは持参した「建築図の冊子」のうち、鐘楼のない300人収容の設計案を提示した。しかし、シメオン三井神父の意見を受け、鐘楼付きの案とするとともに、将来を見越して規模も450～500人収容のものに変更した。

その後、ニコライは紹介された建築家・松室重光に持参した図面を渡し、実施設計を依頼した。松室は聖堂の他、司祭用の棟や信徒集会所の詳細図面と煉瓦塀の詳細図を1か月間で作成した。施工は地元の業者である大西が請け負っている。明治34年（1901）4月に基礎成聖式がなされ、同年のうちにイコノスタスを除く建物は竣工していたが、成聖式は明治36年（1903）4月に行われている¹⁹⁾（写真8，図13・



写真8 京都聖堂

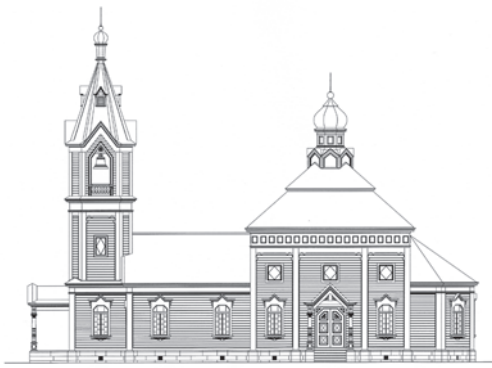


図13 京都聖堂南側立面図（現状）

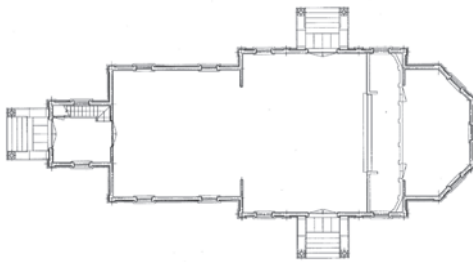


図14 京都聖堂平面図（現状）

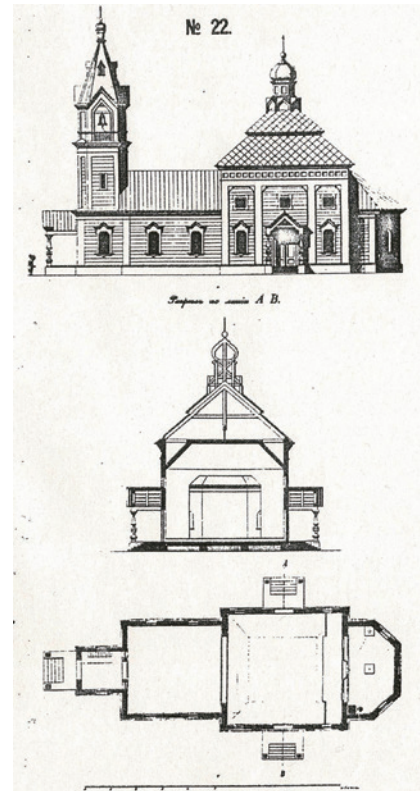


図15 「教会外観及び正面の設計図」No.22

14)。

京都聖堂の遺構は、玄関部分の円柱の柱頭飾り等の細部意匠にわたるまで、図面集のNo.22（図15）を忠実に踏襲していることが確認される²⁰⁾。京都聖堂の玄関から至聖所までの全長は25.45メートルであるが、No.22に掲載されたスケールをサジェンと仮定して計算するとほぼ同様の長さとなる。よって、規模についてもNo.22を踏襲していると考えられる。

松室が行なった実施設計は、雛型図面を可能なかぎり再現するために、施工上の制約に合わせて詳細を具体化していく作業であったものと推測される。

■松山聖堂

明治38年（1905）に日露戦争が終結し、捕虜となったロシア人が日本各地に収

容された。ロシア人捕虜が比較的厚遇を受けたため、ロシア人篤志家らによる支援がなされることになった。松山には収容所が置かれていたため、聖堂建設の機運が高まり明治40年（1907）に多額の寄付が集まり11月に着工、翌明治41年（1908）8月に成聖式が行われた。建物は木造であった²¹⁾。ニコライの日記によれば河村伊蔵が工事を指揮したことが記されている²²⁾。

建設に際してニコライが準備に尽力し、図面を提示したと考えられる。同聖堂について松山聖堂の竣工帳には、「是の松山のハリストス復活聖堂の設計は、原本『プロエクト デレワヤンノイツェルク井』『木造聖堂の設計図譜』の第二十一號に依拠せられた者で、此の圖案の特異は、本堂の高さより、鐘楼の方が低い事である。」と記されている²³⁾。松山聖堂の外観写真（写真9、



写真9 松山聖堂正面

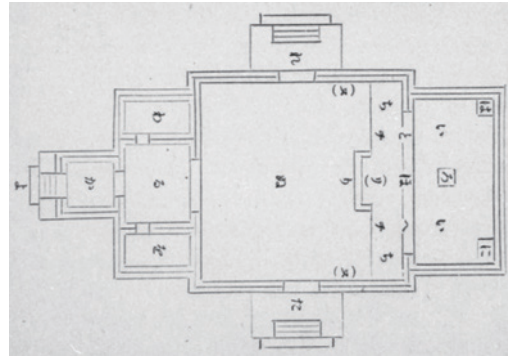


図16 松山聖堂平面図



写真10 松山聖堂側面

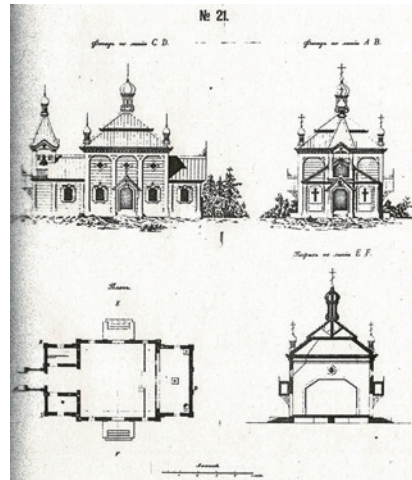


図17 「教会外観及び正面の設計図」No.21

10) や略平面図(図16)と比較すると、「教会外観及び正面の設計図」No.21(図17)の立面と平面の形状が一致している²⁴⁾。No.21は収容人数250人を想定しており、京都聖堂や大阪聖堂よりも小規模である。

同竣工帳では、奥行き(玄関より至聖所)10間5尺、幅(聖所部分)31尺と記されている²⁵⁾。図面集No.21平面図のスケールをサジェンにより計算すると、松山聖堂の規模がやや縮小されているように思われるものの、スケール読み取りの誤差の範囲と考えられ、図面集をほぼそのまま再現するための実施設計がなされたものと推測される。

なお、ニコライの日記では、「モスクワに

いる、松山の教会堂の設計者クセニヤ・フョードロヴナ・コレスニコワ」に建築が順調に進んでいると手紙を書いたことを記している²⁶⁾。これによれば同建築家が「教会外観及び正面の設計図」No.21の設計者ということになる。

■大阪聖堂

明治43年(1910)には木造の大阪聖堂が成聖した²⁷⁾。河村伊蔵が工事監督をつとめ、フォマ尾林が工事を請負っている²⁸⁾。その着工に先立つ明治41年(1908)9月12日のニコライの日記には、河村伊蔵が教会建設許可を求める「要請書」を大阪府庁に提出するため大阪に向かったことを記

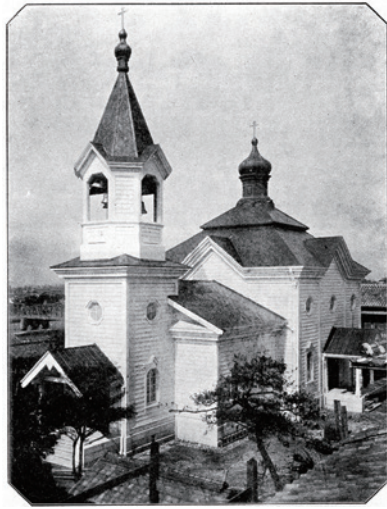


写真11 大阪聖堂

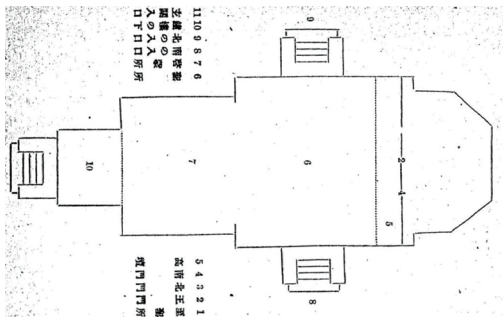


図19 大阪聖堂平面図



図18 「教会外観及び正面の設計図」 No.19

している。この際に「要請書」の資料として教会の「デッサン」を添付しており、「設計図は「聖宗務院の建設承認済み教会設計およびファサード図鑑」第19から採っている。」としている²⁹⁾。大阪教会の古写真(写真11)³⁰⁾から確認できる外観意匠は、「教会外観及び正面の設計図」No.19(図18)とほぼ一致しており、この点はセラフィム辻永氏によって指摘されている通りである³¹⁾。このため「教会設計およびファサード図鑑」第19は、「教会外観及び正面の設計図」No.19と同一の図面であるものと考えられる。No.19は収容人数450～500人を想定したプランで、No.22(京都聖堂)と平面的に同規模で、外観意匠も類

似しているが、聖所部分側面の屋根を一部切り上げ、上部の窓が大きくなっている。竣工した建物の平面規模は、奥行87尺(玄関より至聖所まで)、幅36尺(聖所部分)と確認されるが(図19)³²⁾、「教会外観及び正面の設計図」No.19にはスケールが記載されておらず、比較することができない。

(4) 大正期以降の教会堂

■豊橋聖堂

大正2年(1913)に成聖式が行われた。京都聖堂に類似した平面や外観意匠を有する木造教会である(写真12・13/図20・21)。既に伊藤晴康氏、泉田英雄氏、西澤

泰彦氏による詳細な考察がなされ、河村伊蔵が設計を行うのに際して、雛型となる図面集が存在したことが指摘されている。また、豊橋聖堂と京都聖堂との比較に際して、平面規模がやや小さい点、正面入口部分の柱装飾、窓の意匠、聖所壁面上部の装飾の相違等をあげている。豊橋教会に残る図面には、より京都聖堂に近い立面図が混在していることを指摘し、京都聖堂を基にした姿図ではないかと推測している³³⁾。

ここで指摘された京都聖堂との相違点を検討すると、柱の装飾や形状は、京都聖堂では図案集に忠実に古典主義的細部を援用しているのに対して、豊橋聖堂では幾何学的な意匠になっている。また、聖所壁面上

部の意匠も京都聖堂が図面集をそのまま用いているのに対して、簡略化する一方で軒廻りのコーニスが複雑に重なっている。この点は雨仕舞を考慮した細部ではないかという西澤氏の指摘に頷けるのではないだろうか。

豊橋聖堂に残る姿図は「教会外観及び正面の設計図」No.22と同一の図面、あるいはそれを基にほぼ同内容で製作された図面と推測される。京都聖堂が「教会外観及び正面の設計図」No.22に忠実に実施設計を行ったのに対して、豊橋聖堂では雛形に示された細部意匠の簡略化や実用性に即したアレンジが河村によってなされたものと考えられる。



写真12 豊橋聖堂



写真13 同玄関部分

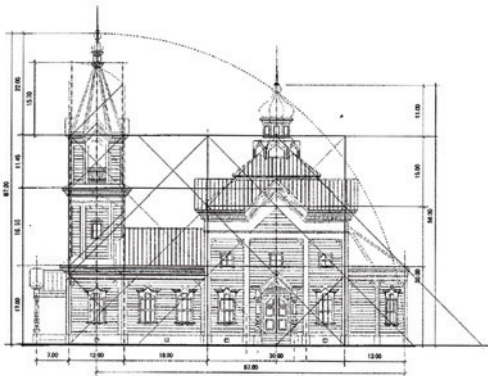


図20 豊橋聖堂南側立面図（現状）

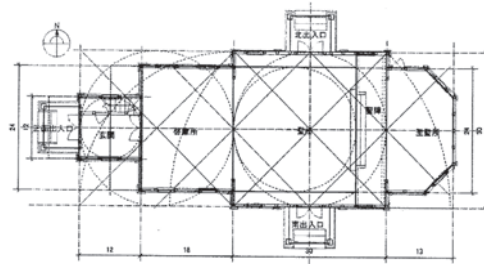


図21 豊橋聖堂平面図（現状）

■白河聖堂

大正4年(1915)に成聖式が行われた木造の聖堂である(写真14)。大正3年(1914)1月に河村伊蔵が建築技師として現地を訪れ協議会が開かれた。その際、「設計図及び木材明細書等は東京にて某専門家に託して調整せしむ」ことになったという記録が残る。その後、5月に再び河村が図面と明細書を携えて白河を訪れ、請負人に地元の大工・中村信太郎が選ばれたという³⁴⁾。「某専門家」の役割は不詳であるが、河村は設計監督として成聖式に出席しており、同聖堂の設計は基本的に河村が担当した可能性が高い。

1階部分は玄関部分と啓蒙所が兼用となり、その上部に2階室が設けられ鐘楼として機能している。聖所部分の屋根を2段の宝形屋根としてクーポル(小塔)を載せる正教会の意匠を用いるが、鐘楼をシンボルとして外観には表さない³⁵⁾。「教会外観及び正面の設計図」中に類似する設計案は見られない。ただし、2階部分に鐘楼を収納する形式は設計図面集中にも確認できる。



写真14 白河聖堂

■函館聖堂(再建)

明治40年(1907)に大火で前教会堂が焼失後、大正3年(1914)8月にニコライ大主教の後任となったセルゲイ主教とともに河村伊蔵が来函し、実地調査を行った。大正4年(1915)6月に起工され、翌5年(1916)10月に成聖式が行われた。建物は煉瓦造で、外壁は漆喰仕上げとしている(写真15)。松山、大阪などと同様に河村伊蔵が工事監督を担当している³⁶⁾。

函館聖堂の設計案について、明治41年(1908)1月21日のニコライ日記には「教会再建計画についてはこちらから図解書を送り、好みと資金によって選択するよう伝えた」と記されている³⁷⁾。セラフィム辻永氏は、「教会外観及び正面の設計図」から、鐘楼部分にNo.24(図22)、聖所等の部分にNo.28(図23)が用いられていると指摘する³⁸⁾。鐘楼のないNo.28の表側にNo.24の鐘楼を付加し、その1階部分の窓をNo.28の聖所部分と同様のアーチ窓に変更すると、函館聖堂の現状立面(図24～26)に極めて類似することが分かる。

ニコライが指示したように、現地の状況に合わせて「図解書」から設計案を選択した可能性を加味すれば、「教会外観及び正面の設計図」の2つの案を構成して最終的な設計案とした蓋然性は高いものと思われる。



写真15 函館聖堂(建設当初)

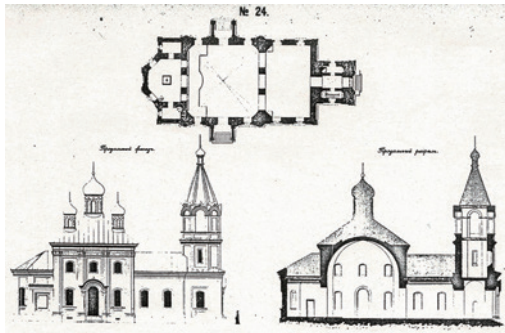


図22 「教会外観及び正面の設計図」 No.24

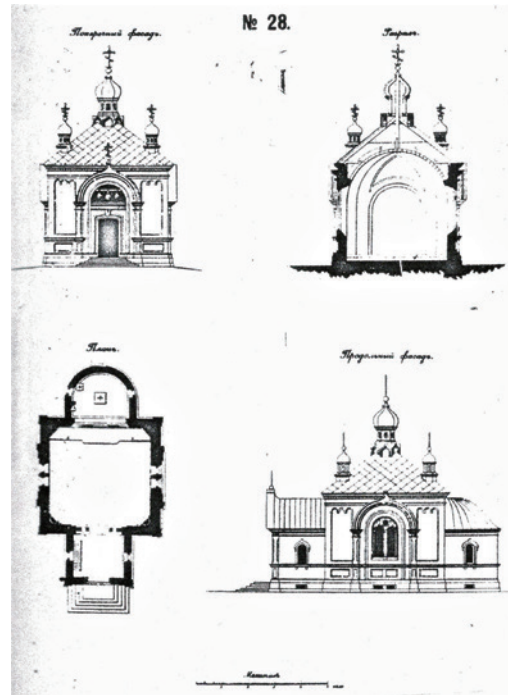


図23 同No.28



図24 函館聖堂南側立面図（現状）

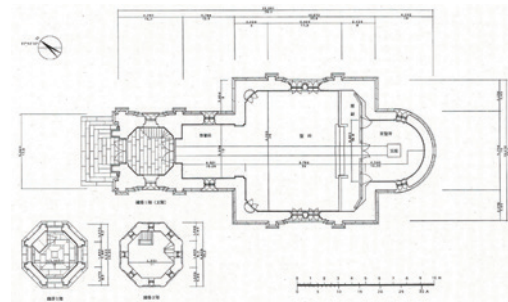


図26 同平面図（現状）



図25 同正面立面図（現状）

■金成聖堂

昭和9年（1934）に建築された。設計は河村伊蔵の息子・内井進，施工は地元の大工である木村利三郎と伝えられている。河村伊蔵も工事監督として参加しており，河村親子による設計と推測されている³⁹⁾。建物は木造で，柱や長押部分を濃い配色の塗装で強調する外観である。屋根は雄勝産のスレートによる鱗葺としている。信徒控室等を確保するため啓蒙所の空間は広がらないが，上部には鐘楼を設けている（写真16）。



写真16 金成聖堂

鐘楼と聖所屋根ともに宝形造で、「教会外観及び正面の設計図」に類似する案は見られない。しかし、規模の縮小や簡素化を図りつつも、同図面集に見られる鐘楼付きのバシリカ型聖堂の構成を踏襲している。一方で、鈴木甲子男氏が指摘するように⁴⁰⁾、配色や簡略化された装飾にはモダンデザインの影響が感じられる。

4. 正教会の教会堂建築の変遷と 図面集の役割

前節において概観した全国の正教会教会堂から、形式の変遷について以下の段階を見出すことができる。

(1) 導入期における形式の模索

ロシア領事館に併設された初代函館（箱館）教会堂を例外とすれば、明治初期の教会堂はロシア正教会の特徴であるロシア・ビザンチン様式を踏襲したものとはなっていない。注目されるのは、東京十字架聖堂の半八角形の突出部の意匠を模して佐沼や石巻の教会堂が建てられていることである。この時期においては、模範となるロシア正教の教会堂意匠が示されるに至っておらず、本部である東京十字架聖堂の意匠が

部分的に切り取られて、外観の主要部分に表現されたといえよう。

なお、小規模なものでは、明治14年（1881）建築（明治30年頃に礼拝堂部分を増築）の手賀教会堂（千葉県柏市）⁴¹⁾、明治22年（1889）建築の坏教会堂（茨城県笠間市）⁴²⁾、大正3年（1914）建築の半田教会堂⁴³⁾など、民家とあまり変わらない和風の教会堂が明治前半から大正初期まで建てられ続けている。

(2) ニコライ堂以降の

ロシア正教会からの直接的導入

東京復活大聖堂では、ニコライが一時帰国に際してロシア人建築家のミハイル・シチュールポフに直接設計を依頼し、当時主流であったビザンチン様式のリヴァイヴァルによって基本設計がつけられた。日本の正教会の中心聖堂として、ロシアの本格的な聖堂に準じる案であったと言える。実施設計及び工事監理は建築家のジョサイア・コンドルが担当した。同聖堂はロシア正教会の模範的な建築様式の直接的な導入であり、日本の正教会における最初の本格的な聖堂であった。

ニコライ堂建設以降、仙台、京都、松山、大阪、豊橋といった地方都市に拠点となる聖堂を整備する際に用いられたのが雛型となる図面集であった。この5聖堂を概観すると、資金等の制約により原設計（図面集雛型）を断念して部分的に規模が縮小された仙台聖堂を除き、「教会外観及び正面の設計図」中に見られる設計案を踏襲する実施設計がなされている。殊に、京都、松山、大阪の各聖堂では、雛型となる設計案を忠

実に再現することを意図し、実施設計の作業は、敷地制約に合わせた規模の調整や、施工上の理由による工法の調整などに限定されていたと推測される。

(3) 日本人スタッフによる正教会の

建築言語の習得と応用

一方、豊橋聖堂では、「教会外観及び正面の設計図」中の設計案を忠実に踏襲した京都聖堂に倣いつつも、実施設計者とされる河村伊蔵によるアレンジがなされていることが分かる。既に指摘されているように、河村は工法の合理性や雨仕舞などの現実的要求に対応するため、意匠的な面においても自身のアレンジを加えている。

続いて河村が関与した函館聖堂では、既往の知見により指摘されているように、「教会外観及び正面の設計図」の2種類の図案が構成された可能性が推測される。河村のような教会の建設担当スタッフがハリストス正教会の聖堂建設に携わる経験を積むことにより、正教会の建築言語を習得し、それらを構成することが可能となった段階と考えられる。

同じく豊橋聖堂以降に河村が関与した白河、金成聖堂では、図面集を直接雛型としたという事は確認できない。しかし、聖所部分の屋根、玄関部分などは、「教会外観及び正面の設計図」に度々現れる意匠を有する。これら教会の外観意匠は、正教会の建築言語を習得した河村が、雛型中のパーツを再構成した可能性が高いと考えられる。他の小規模な教会堂と比較して、正教会建築への設計者の理解の高さが感じられ、各地の本格的な聖堂に携わってきた河

村ならではの作品と言えるのではないだろうか。

以上のように、河村伊蔵はニコライ堂や雛型による施工を経験した後、豊橋聖堂において施工上の現実的な制約に基づくアレンジを図り、函館聖堂では図面集と組み合わせる応用を試みている。また、白河聖堂や金成聖堂では正教会建築の要素を抽出して再構成する手法へと進んでいる可能性が考えられる。こうした過程は必ずしも年代を追って直線的に進んでいる訳ではないが、移入された雛型の習得からその各要素の再構成による応用へと向かう流れを確認することができよう。

5. 「教会外観及び正面の設計図」の意義：体系的な図案集使用による設計システム

初期のカトリックやプロテスタント教会においても、教会建築に際して雛型を使用した可能性は大いに考えられるものの、ハリストス正教会のような体系的な設計図面集の存在は現時点では報告されていない。構造、規模、鐘楼の有無などによって教会堂の基本設計をシステムティックに行うことのできる体系的な図面集の使用は、日本においてはハリストス正教会の特徴といえることができよう。カトリック教会や、日本聖公会をはじめとするプロテスタント教会において、ミッション建築家が活躍したことと比較して特徴的である。

こうした図面集の使用がなされた要因として、日本における宣教においては、ロシアから派遣される宣教スタッフが不足して

いたことが考えられる⁴⁴⁾。既往研究において、カトリックやプロテスタントと比較して、ハリストス正教会における本国から派遣された宣教師の数は著しく少ないと指摘されている。正教会では、現地人である日本人スタッフ（伝教師）を雇用するシステムによって、この宣教師不足を補っていたことが知られている。

さらに、正教会の建築がビザンチン様式に由来する特殊な形式を有していたことも要因としてあげられる。ロシアからの建築的素養を有する宣教スタッフの派遣が望めないことや、一般の建築家によって設計がなされるには正教会の建築は特殊であったという要素が考えられよう。このため、図面集を雛型として用いることがなされ、後には河村のように正教会建築に長年の経験を積んだ特殊な専門家の存在によって教会堂の建築が担われることになったと考えられる。

6. おわりに

以上の概観から、ハリストス正教会の教会堂建築の位置づけには、新たな視点を見出すことができるのではないだろうか。直接的にロシア人建築家による設計案が移入されたニコライ堂以降、各地の聖堂建設を

進める際に、雛型となる設計図面集が活用されたことは、日本の近代建築史においても特筆すべき点である。仙台、京都、松山、大阪の各聖堂はその過程を示す重要な事例であり、図面集の忠実な再現として現存する京都聖堂は重要である。

また、設計図面集によるロシア正教会の教会堂建設を担当する中で、河村伊蔵のような人材が育成された。河村の建築活動には、正教会建築の基本となる形式や意匠を習得することにより、雛型の忠実な再現から、そのアレンジや、要素の再構成へと向かう流れを確認することができる。

今後各地のハリストス教会の調査研究が進み、正教会建築の流れを位置づける試みが検証されていくことを期待したい。

謝 辞

資料の提供・掲載や、ロシア語文の翻訳等についてご協力頂きました京都ハリストス正教会のパウエル及川信 長司祭、「教会外観及び正面の設計図」の提供及び内容に関するご示唆を頂いた仙台ハリストス正教会のセラフィム辻永昇 大主教には大変お世話になりました。また、ご協力を頂いた正教会関係者の方々に深くお礼を申し上げます。

いしかわ ゆういち
石川 祐一（文化財保護課 主任（建造物担当））

註

- 1) 石川祐一「京都ハリストス正教会生神女福音聖堂の建築経緯」『京都市文化財保護課研究紀要創刊号』（京都市文化財保護課，2018年）
- 2) 前掲1)
- 3) 京都ハリストス正教会・及川氏らに翻訳内容のご教示を受けた。
- 4) 鈴木甲子男「黎明期の正教会建築（三）」『正教時報1090』1981年7月号（日本ハリストス正教会）pp.14-17。麓和善「重要文化財としての復活聖堂」『函館ハリストス正教会史 亜使徒日本の大主教聖ニコライ渡来150年記念』（函館ハリストス正教会史編集委員会，2011年）pp.258-262。
- 5) 鈴木甲子男「黎明期の正教会建築（四）」『正教時報1091』1981年8月号（日本ハリストス正教会）pp.14-16。
池田雅史『ユーラシア・ブックレット No.177 ニコライ堂と日本の正教聖堂』（東洋書店，2012年）pp.14-16
- 6) 『宮城県の近代化遺産：宮城県近代化遺産総合調査報告書』（宮城県教育委員会，2002年）pp.116
- 7) 坂田泉「宮城県の日本ハリストス正教会建築断章」『宮城県の研究 第7巻』（清文堂，1983年）pp.399-413。
- 8) 鈴木甲子男「正教会の会堂建築（一）」『正教時報1093』1981年10月号（日本ハリストス正教会）pp.13-14。
- 9) 黒田順子，泉田英雄「石巻ハリストス正教会教会堂の形態に関する考察」『日本建築学会大会学術講演梗概集』（2015年9月）pp.761-762。
- 10) 前掲5) 池田雅史論考pp.41-46。
- 11) 東京復活大聖堂の建築概要，建築経緯，震災後改修経緯については，財団法人文化財建造物保存技術協会編『重要文化財日本ハリストス正教会教団復活大聖堂（ニコライ堂）保存修理工事報告書』（日本ハリストス正教会教団，1998年）を参照した。
- 12) 仙台ハリストス正教会『仙台ハリストス正教会史』（2004年）pp.61-70。
- 13) 石川喜三郎編『日本正教傳道誌 貳之巻』（日本正教会編集局，1901）p94。前掲12）p.70にも引用されている。
- 14) 前掲12）pp.71-73。
- 15) 小倉強『明治の洋風建築』（宝文堂，1976年）pp.91-94。また，前掲7）p.420に同様の図面が掲載されている。
- 16) 坂田泉による前掲7）の論考pp.413-425，及び鈴木甲子男「正教会の聖堂建築（四）」『正教時報1100』1982年5月号（日本ハリストス正教会）pp.12-15。
- 17) 『北鹿ハリストス正教会聖堂保存修理工事報告書』（大館郷土館，2000年）。
- 18) 鈴木甲子男「正教会の聖堂建築（三）」『正教時報1098』1982年3月号（日本ハリストス正教会）pp.10-14。
- 19) 中村健之介監修『宣教師ニコライの全日記6 1899年～1901年』（教文館，2007年）pp.149-151，pp.154-155。
- 20) 前掲1)
- 21) 鈴木甲子男「正教会の聖堂建築（七）」『正教時報1103』1982年8月号（日本ハリストス正教会）pp.8-9。
- 22) 中村健之介監修『宣教師ニコライの全日記8 1904年7月～1908年』（教文館，2007年）p.343。工事期間中に追加建物や柵の見積を松山に滞在する河村に送っていることから裏付けられる。同p.294。
- 23) 水島行揚『松山ハリストス復活聖堂 全』（正教会事務所，1904年）p.6。
- 24) セラフィム辻永氏は，松山聖堂が「教会外観及び正面の設計図」No.21に該当することを指摘している。同氏のご教示による。
- 25) 前掲23）p.6。
- 26) 前掲22）p.316。
- 27) 前掲21）pp.10-12。
- 28) 豊橋ハリストス正教会聖堂建築調査団『愛知県指定有形文化財 豊橋ハリストス正教会聖使徒福音者馬太聖堂建築調査報告書』（豊橋市教育委員会，2007年）p.6。
- 29) 前掲22）p.350。

- 30) 『大阪生神女庇護聖堂』(正教会編集所, 1911年) 図版など。
- 31) セラフィム辻永氏のご教示による。
- 32) 前掲30) p.8。
- 33) 前掲28) 第3章, 第4章。
- 34) 『白河ハリストス正教会史』(白河ハリストス正教会, 2006年) pp.104-106。
- 35) 『福島県の近代化遺産: 福島県近代化遺産(建造物等)総合調査報告書』(福島県教育委員会, 2010年) p.156。
- 36) 前掲4) 『函館ハリストス正教会史 亜使徒日本の大主教聖ニコライ渡来150年記念』pp.263-269。『重要文化財 函館ハリストス正教会復活聖堂保存修理工事報告書』(財団法人文化財建造物保存技術協会, 1989年) pp.16-19。
- 37) 前掲22) p.285。
- 38) セラフィム辻永氏のご教示による。
- 39) 東北歴史博物館編『宮城県の近代化遺産 宮城県近代化遺産総合調査報告書』(宮城県教育委員会, 2002年) p.117。
- 40) 鈴木甲子男「ロシア革命以降の正教会聖堂建築」『正教時報1106』1982年11月(日本ハリストス正教会)pp.9-11において, 配色や簡略化された装飾に「近代建築」的な要素が見られることを指摘している。
- 41) 「旧手賀教会堂」解説 千葉県柏市HP。
- 42) 『茨城県の近代化遺産: 茨城県近代化遺産(建造物等)総合調査報告書』(茨城県教育委員会, 2007年) p.271。
- 43) 半田市指定有形文化財広報資料(半田市教育委員会, 2019年)
- 44) 中村健之介『宣教師ニコライと明治日本』(岩波書店, 1996年) p.87等。

(図版出典)

- 図1～8:「教会外観及び正面の設計図附属するイコノスタシスの設計図, 会堂の設計図(集落部における教会建設の際に推奨できるもの)」(聖シノド, 1899)以下,「教会外観及び正面の設計図」と表記。
- 図9・10:小倉強『明治の洋風建築』(宝文堂, 1976年)
- 図11・12:「教会外観及び正面の設計図」
- 図13・14:伸和建設作成図面
- 図15:「教会外観及び正面の設計図」
- 図16:水島行揚『松山ハリストス復活聖堂 全』(正教会事務所, 1904年)
- 図17・18:「教会外観及び正面の設計図」
- 図19:『大阪生神女庇護聖堂』(正教会編集所, 1911年)
- 図20～21:豊橋ハリストス正教会聖堂建築調査団『愛知県指定有形文化財 豊橋ハリストス正教会聖使徒福音者馬太聖堂建築調査報告書』(豊橋市教育委員会, 2007年)
- 図22～23:「教会外観及び正面の設計図」
- 図24～26:『重要文化財 函館ハリストス正教会復活聖堂保存修理工事報告書』(財団法人文化財建造物保存技術協会, 1989年)
- 写真1:『函館ハリストス正教会史 亜使徒日本の大主教聖ニコライ渡来150年記念』(函館ハリストス正教会史編集委員会, 2011年)
- 写真2:『正教時報』1981年8月号(日本ハリストス正教会)
- 写真3:京都ハリストス正教会所蔵
- 写真4:財団法人文化財建造物保存技術協会編『重要文化財日本ハリストス正教会教団復活大聖堂(ニコライ堂)保存修理工事報告書』(日本ハリストス正教会教団, 1998年)
- 写真5:著者撮影
- 写真6:仙台ハリストス正教会『仙台ハリストス正教会史』(2004年)
- 写真7:北鹿ハリストス正教会HP。
- 写真8:著者撮影
- 写真9・10:水島行揚『松山ハリストス復活聖堂 全』(正教会事務所, 1904年)
- 写真11:牛丸康夫『大阪正教会 百年史譚』(大

阪ハリストス正教会, 1978年)

写真12・13: 著者撮影

写真14: 白河ハリストス正教会パンフレット

写真15: 『重要文化財 函館ハリストス正教会復

活聖堂保存修理工事報告書』(財団法人文化

財建造物保存技術協会, 1989年)

写真16: 著者撮影